

YY(ワイワイ)

担当者(外部講師):前内千景さん

「アトリエCOOからYYへ」

YYのアート活動は剣淵西原学園に通所・入所されている方を対象に月に2回開催しています。会場は、剣淵町内の西原学園所有の施設を利用しています。

この活動は、元々1996年から2006年まで剣淵町で活動していた「アトリエCoo」が前身で、これは、施設外部にアトリエを設けて西原学園と剣淵北の社舎の利用者の中から、特にアート活動に興味の有る方や、可能性の見える方を数人抜粋してのアート活動でした。しかし、資金面の問題や、使用していた建物の老朽化等の理由から、その活動は終了してしまいます。

西原学園では“るんるんサークル”というアート活動が日常的にあります。しかし、「アトリエCoo」のような施設外での活動は利用者のやる気にもつながっていたようで、その活動が無くなって、改めてその存在の大切さを実感したそうです。そこで、西原学園の主導によって「アトリエCOO」から「YY」へと、名称を変えて、2010年6月からアート活動を再スタートしています。



担当者と一緒に創作しています 少数ならではの和やかな雰囲気です



担当者の前内さんと作業風景

「スタートしたYY」

アート活動の担当者には、アトリエCooのボランティアスタッフだった前内さんが外部講師として就任。ちなみに前内さんは、陶芸、広告デザイン、木工などの職業経験が豊富な方なのです。

アート活動の参加者は西原学園から、各回1人から5人のローテーションで、希望者は全員が参加できるようになっています。その中でも特に、アート活動に強い興味を持ち、他の方よりも高いモチベーションで創作を行っている人は複数回参加しているようです。参加者には毎回、活動内容を伝えた上で参加の意思を確認しており、意思が無い場合は無理に参加を促さないとの事です。

参加者は集中してアート活動を行える環境を喜んでいますが、とくに施設を離れてアート活動に来る事で、施設生活では会う事がない外部の人とのコミュニケーションを楽しめるという環境は大きな魅力となっているようです。

「参加者へのアプローチ」

前内さんは、「この人は、この様な作品を描くので、こういう画材を用意して…」のような個別の支援も必要かと考えていますが、現在はより多くの参加者にアート活動を体験してもらう事を優先に考えています。将来的には参加希望者が固定した時に、よりその人に適した支援を考えるようです。

また、前内さんは西原学園としてではなく、YYとしての展示会の開催も考えています。作品をポストカードやトートバックの柄にする等、人の手に渡る物の製作をするアイデアも持っています。

「アート活動での作品がグッズになったら、作る人も、見る人も、みんな楽しいと思うんです。」と前内さんは意欲的です。

「活動をしていて感じる事」

一般に見かけるアウトサイダー・アートの展示会ではクオリティーの高い作品を選定していますが、創作現場では、作品とは言いがたい完成度でも、表現がとってもユニークなものがあったりするそうです。

続けて描いていくことによって少しずつ表現に変化が見られるのが、前内さんにとって楽しみとなっているようです。

前内さんは、この取り組みで作られた作品を「障がい者のアート」として、福祉的な位置づけで観ないで欲しいと願っています。「作者たちはアート活動動機を純粋に楽しんでいます。ですから、世にある多くの作品の中の目に留まったユニークな作品の作者がたまたま障害のある人だった。というぐらいの捉え方でいいのではないのでしょうかと提案しています。

「アート活動の効果と必要性」

「福祉に従事する職員は福祉を専門としている方が多いので、当然、アート活動に対する感心や必要性が薄いのです。」と前内さんは言います。

アート活動は、様々な効果を生むようです。例えば、描く事が精神の安定に繋がっていることや、工夫する事や手先を使って物を作る事は脳を刺激する効果もあります。その他に作品の制作、発表することで、良好なコミュニケーションが生まれるとも言います。作品を完成させることは自信にも繋がり、生活そのものが積極的になることもあるようです。

「福祉施設の職員には、ぜひ実際にアート活動を見て、その重要性に興味をもってほしい」と前内さんは望んでいます。



嬉しそうに前内さんに完成した作品を見せてもらう参加者

大雪の園(社会福祉法人 鷹栖共生会)

北海道上川郡鷹栖町18線9

担当者:作田 由美子さん、

非常勤講師:堀川さん、高橋さん

「アート活動の概要」

毎週火曜日と隔週の月曜日に午前と午後を合わせて2時間30分ほどのアート活動を行っています。

担当者の作田さんの他に、専門的な知識がある非常勤講師の2名と施設の職員も加わって創作補助をしています。

アート活動に参加しているのは20人ほどで、創作には開放型の空間「プレイルーム」と人の出入りの少ない「デイルーム」が用意されており、静かな環境での集中した創作活動が向いている利用者は、デイルームで創作を行なっています。



「デイルーム」にて指導する高橋さん

共に絵を描かなくなる様な場面もありますが、無理に創作を勧めません。時間が経つと、再び自然と描きはじめたりします。

おおまかにいって、プレイルームにて創作している人は描くという行為を楽しむ傾向にあり、デイルームにて創作している人は作品の完成をばげみとして取り組んでいます。

「展覧会の開催」

作品の発表は独自に展覧会を開催しており、他の交流が有る施設との合同展も毎年開催しています。

近年の実績としては、単独の展覧会に「こども富貴堂 ギャラリーKIDS」「喫茶 羅布」、合同展に「旭川市中央図書館 ミニギャラリー」「けんぶち絵本の館 展示室」などがあります。



「デイルーム」にて創作された作品

展覧会を開催する際には、描きためた作品の中から担当者が選り分けて出展しています。

しかし、そうした膨大な量の作品の中には描きかけの作品も多いので、心苦しいが何かの機会に一度整理する必要があるとも感じています。

「人気のセカイノカタチグッズ」

大雪の園では、作品を利用したグッズを開発しています。

この、施設のグッズを「セカイノカタチ」というブランド名とし、一般での販売をして人気となっています。なお、トートバックのイラストを描いている利用者さんは、エコバッグをデザインする一般のコンペティションで入賞するなど、美術関係者等にも評価されています。

トートバックやポーチといった製品の人気や評価が、施設のアート活動にいろいろな可能性を見いだしたと感じさせてくれました。

「アート活動での関わり方」

非常勤講師の高橋さんは、適切な画材の提供のみを行なう「助手」に徹しています。良い絵を描いてもらうための環境を整え、いかに利用者に才能を発揮してもらえるか考えるかを大切にしています。

もう一人の非常勤講師の堀川さんは「彼らの作品はクオリティーの善し悪しより、製作に対するエネルギーが素晴らしいので、作品を通じて活動や作者をより理解してもらえる様にプロデュースしていきたい」と考えています。

一方創作活動の療育的な側面も理解しており、描くことによって心が安定した生活をおくることにも期待しています。

そして堀川さんは、障がいのある人のアートに魅力を感じる人、関わる人の興味関心が、現代アートも含めたアート全般に広がって欲しいと考えています。



「プレイルーム」の様子(写真は休憩中)



「デイルーム」での創作の様子



一般のコンペティションにて入賞したトートバック

NPOラポラポラ

旭川市東山2857-46
代表:工藤 和彦

「ラポラポラの誕生」

既存の美術教育を受けた事がない創作者たちが、伝統や流行にとらわれる事なく、衝動をストレートに表現している作品は「アール・ブリュット」または「アウトサイダー・アート」と言われています。創作者の中には知的な障害のある人、精神的な疾患者、降霊術者や奇人と言われている人たちがいます。

この創作者たちの特徴は、評価を受けるために創作しておらず、「自分自身による、自分のためのアート活動」をしている人たちと言えます。

ですから、作家としての自覚がなく、自ら作品を発表する事はありません。存在を知られる事なく、

孤独のままに創作を重ね、死後に大量の作品を発見されるケースもあります。ところで「そのアートって、どのようなもの?」という説明はなかなか難しいものです。

実際に作品を見て、感じてもらうしか方法はありません。そこで、このアートの魅力に共感している有志メンバーが中心となって、NPOラポラポラを2006年11月に旭川市に設立しました。「ラポラポラ」とはアイヌ語で「羽ばたく」という意味で、人知れず制作されている作品が、人々に評価され、北海道から国内、世界に羽ばたいていく事を願って命名したものです。また、直にアウトサイダー・アート作品を鑑賞できるスペースとして2006年12月にボーダレス・アートギャラリーラポラポラを旭川市街地にオープンさせました。このギャラリーは2010年5月まで、身近な存在としてアウトサイダー・アートを中心にアートの魅力を市民に伝えていきました。



「ボーダレス・アートギャラリーラポラポラ」にて開催した展覧会の案内状(一部)

「北海道立旭川美術館との連携」

NPOラポラポラでは広く世間の人達にこのアートの存在を知らせるために、北海道立旭川美術館の協力を得て2つの大規模な展覧会を企画、開催しました。

海外の評価の高い作品をコレクションしているスイス・アールブリュット・コレクションと評価の定まらない日本の作品とのコラボレーションによる展覧会「アール・ブリュット/交差する魂」展(2008年1月~2月)、スイスの精神病院で46年間もの歳月、描き続けたアール・ブリュットの代表的な作家の回顧展、アロイズ展(2009年10月~2010年1月)また、同時開催で「北海道のアウトサイダー・アート」展も開催しました。展覧会の開催中には、スイス・アール・ブリュットコレクション館長リュシアン・ベリーさんやアロイズ財団学芸員のセリーヌ・ムゼルさん、パリ市立美術館館長マーティン・ルザルデーさんによる講演会なども開催し、より深くアウトサイダー・アートの知識を深める取り組みも行っています。

また、2010度からは旭川だけではなく帯広や函館、札幌などでの各地域で小規模な展覧会の開催にも力を注ぎ、北海道内の多くの人にアウトサイダー・アートを知ってもらう活動を広げています。



2010年度に実施したNPOラポラポラ主催の展覧会やワークショップのフライヤー(一部)



「アール・ブリュット/交差する魂」展 フライヤー



「アロイズ」展 フライヤー



「直面している課題」

2009年からNPOラポラポラでは北海道全域でのアウトサイダー・アートの実態調査を行っています。その情報は国内の関係団体や海外にも発信しており、北海道のアウトサイダー・アートの存在を広く伝えています。この調査で多くの創作現場にお伺いしております。この調査で多くの創作現場にお伺いしております。作家個人や福祉現場などでは、作品の保存環境を整えるのは大変難しく、次第に作品が劣化、消失してしまいます。これは、目前に迫った大きな問題です。ラポラポラでは国内の関係機関と連携し、現在この問題に取り組んでいます。

また、創作者の利益を考える上で、作品の販売や作品を利用したグッズ制作などにも取り組みたいところですが、その契約をする際には作家ご本人と契約できないケースもあります。その場合は成年後見人制度などの利用が必要になります。これらの課題は作家を身近に支えている家族や福祉現場の職員と個々に連携して取り組んでいく必要があります。

「アートを身近に」

アウトサイダー・アートに限らず、人の創造する行為、表現と言ったものは、普遍的なものであり、生きる活力となるものです。また、アートを鑑賞するという行為も人の創造力を豊かにする上で必要なものです。

NPOラポラポラでは、身近にアートを感じられる取り組みをしています。その一つが旅する雑貨店「ポンラポ」です。これは全国各地の福祉施設が作る雑貨や、現代アーティストの作品などユニークなものを集めて、コンパクトなミニミニ雑貨店と共にトランクケースに入れて、ギャラリーやカフェなど全国各地をリレーして展示販売してもらう取り組みです。「モノ」と「人」、「人」と「人」を繋げていくミニミニ移動雑貨店「ポンラポ」は人気となっています。

NPOラポラポラ

また、ラポラポラでは子供達を対象としたユニークなワークショップを定期的に行っています。これは「アート」を共に取り組む環境を用意する事で、障害の有無などに関係のないコミュニケーションを体験してもらおう試みです。このような取り組みを行う事で、アウトサイダー・アートに限らず、アートそのものに対する関心も高めていきたいと考えています。

「アートNPOとして」

NPOラポラポラはこれから、アウトサイダー・アートに限らず「アートそのものの魅力を伝える」とした視点をもって、多くのアーティストと連携して活動に取り組みたいと考えています。人の持つ表現の多様性を伝えることで、差別や様々な境遇、枠組みなどから解放された人と人の繋がりが生まれると考えているからです。

文：工藤和彦



ミニミニ移動雑貨店「ポンラポ」

HOKKAIDO OUTSIDER ART FORUM 2010

北海道アウトサイダー・アート・フォーラム 2010
北海道の創作現場レポート

企画・制作・発行：NPOラポラポラ
編集・文：工藤和彦
取材・デザイン：今津智士
助成：日本財団 太陽北海道地域づくり財団

発行所：NPOラポラポラ
〒071-8171
旭川市東山2857-46

NPOラポラポラ
<http://lapolapola.com>